



営農タイムリー！

発生予察情報について(7月)



2024年7月8日発行

病害虫発生予報第5号(7月)

今後注意すべきその他の病害虫等

イネ

1. トビイロウンカ、コブノメイガ

6月第3半トビイロウンカ及びコブノメイガの予察灯での誘殺を認めていない。いずれも海外飛来害虫であるため、今後梅雨前線が北上したり、活動が活発化すると多飛来旬現在、することがあるので、予察情報に十分注意する。

トビイロウンカ



成虫



幼虫

被害水田



コブノメイガ



成虫



幼虫

2. 白葉枯病

- (1) 暴風雨などが予想される時は深水にするなど、極力葉の損傷を少なくするよう努める。
- (2) 本病は穂ばらみ期から目立つようになり、7~9月頃に感染のピークを迎える。高温多湿の環境で多発する傾向があり、梅雨時の長雨や台風による暴風雨をきっかけに感染が一気に広がる恐れがあるので注意が必要である。



発生初期

3. イチモンジセセリ（イネツトムシ）

6月中旬現在、丹後地域で発生を認めている。晩植田や窒素過多の田で発生が多くなる。防除時期は7月下旬～8月上旬の幼虫ふ化期である。



成虫



老齡幼虫



被害

4. フタオビコヤガ（イネアオムシ）

- (1) 6月中旬現在、発生を認めていない。山間・山沿い地域や集落周辺など、風通しの悪い水田で多発しやすく、曇雨天が多い年に発生しやすい。
- (2) 出穂前後に発生する世代の加害が多いと被害が出る場合がある。幼虫が4、5齢に成長すると摂食量が増加するため、被害が急激に拡大するので注意する。



雄成虫



老齡幼虫



中齡～老齡幼虫による被害

5. イネクロカメムシ

- (1) 常発地では注意する。
- (2) 6月中旬から7月上旬が越冬成虫の水田への移動の最盛期であり、この時期の薬剤防除が最も有効である。ほ場をよく観察し、3株に1頭以上の発生（幼虫を含む）を認めたら防除を実施する。



成虫



幼虫



イネクロカメムシによる変色茎

野菜

1. キュウリ 褐斑病

発生すると被害が大きいので、夏秋栽培では注意し、下葉の摘葉、摘心等の予防に努める。



病徴



被害



2. キュウリ 退緑黄化病、キュウリ 黄化病、CABYV

いずれもウイルスによる病害で、**退緑黄化病**及び**黄化病**では葉に退緑及び黄化症状を示して減収し、CABYV(和名未定)では中位葉の半分程度に退緑及び黄化症状が発生して減収する。いずれもキュウリ以外のウリ科作物でも発生する。媒介は、**退緑黄化病**では**タバココナジラミ**により、**黄化病**では**オンシツコナジラミ**による。CABYVの媒介虫は不明であるが、海外では**アブラムシ類**とされている。



退緑黄化病



黄化病



3. サツマイモ 基腐病

最近府内で確認された病害で、本ぽでは地際部が黒くなり、塊根はなり首から腐敗し、降雨等により周辺の株に広がっていく。本病の発生を確認したら、罹病株の抜き取りと、薬剤防除が必要である。



初期の症状
(葉の変色)



株元の
黒変



被害

4. トマト黄化葉巻病 及び トマト黄化病

トマト黄化葉巻病は、黄化葉巻ウイルス (TYLCV: Tomato Yellow Leaf Curl Virus) の感染により引き起こされる病気で、症状は、先端部の葉が内側に巻く、葉縁が黄化、株の萎縮等で、タバコナジラミによって媒介される。

トマト黄化病は、葉の一部の葉脈間が退緑及び黄化し、生理障害の苦土(マグネシウム)欠乏の症状に類似し、タバコナジラミ及びオンシツコナジラミによって媒介される。



黄化葉巻病



黄化病



マグネシウム欠乏症



5. タバココナジラミ

タバココナジラミは世界中に分布し、多くのバイオタイプが存在する。中でもバイオタイプQは薬剤感受性が低く難防除害虫であるので、防虫ネットや黄色粘着板及び農薬等を組み合わせた「総合的害虫管理」が有効となる。



成虫



幼虫



6. タバコガ類

幼虫が果実に食入すると薬剤がかかりにくくなるので、早期発見に努め、食入前及び若齢期の防除に努める。

成虫



成虫

7. ハスモンヨトウ

(1) 卵塊は綿毛状のもので覆われ、ふ化した幼虫は若齢期を集団で過ごし、葉の表皮を残して裏側を食害する。食害された葉は白く透け見えることから「白変葉」と呼ばれ、発生初期の目安となる。

(2) 齢が進んだ幼虫は周囲に分散し、かつ、薬剤の効果が著しく低下する。



雄成虫



雌成虫



老齢幼虫



ふ化幼虫



幼虫